

名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2025 年 9 月 30 日

学部・学科名 現代国際学部国際教養学科

担当教員氏名 城月 雅大

1. プログラム名称	地域研究・国際研修プログラム（イタリア研修）
2. 渡航先国名	イタリア
3. 派遣期間	2025 年 8 月 27 日（水）～2025 年 9 月 10 日（水） 15 日間
4. 派遣先教育機関名	サッサリ大学
5. 参加学生数	6 名
6. 派遣目的	本プログラムの目的は、「観光まちづくり」と地域の持続可能性に関する国際的視点と実践的知見を深めることにあります。人口減少、環境劣化、自然災害といった課題を抱える地域社会において、どのように観光を通じて再生と継承を図るかを、実地調査と現地住民・行政との対話を通じて考察します。また、サッサリ大学の学生とチームを組むことで、異文化協働による課題解決能力を養うことも目的の一つです。
7. 派遣内容	前半（8 月 27 日～9 月 6 日）は、ロンドンにおける視察ののち、サルデーニャ島にてサッサリ大学の学生と合同でワークショップ形式の研修を実施しました。現地でのフィールドワークを通して、住民との対話、課題ヒアリング、地域資源の観察・記録を行い、最終的には自治体（市長）および住民に向けた提案発表を英語で行いました。 後半（9 月 7 日～9 日）はローマにて、歴史都市における保存と観光の共存の実践を視察。都市空間の再活用、オーバーツーリズムの制御、市民の暮らしと観光の調和といった課題について学びました。視察後には学生による自由行動時間も設け、観光者としての視点で現地の魅力や課題を体験的に学びました。

8. 成果	①異文化協働の実践：サッサリ大学の学生と混成チームで活動する中で、言語的・文化的背景の異なる相手との意思疎通や、合意形成の方法を体験的に学びました。 ②現地課題への提案力：フィールドワークで得た知見をもとに、観光まちづくりに関する具体的な提案を英語で発表。実社会への提案としての重みを感じながらプレゼン力を高めました。 ③地域を見る視点の深化：「観光資源を見る」のではなく、「地域で暮らす人々の視点からまちを見る」ことの大切さを体感。単なる観光ではなく、持続可能なまちづくりの視点を育みました。 ④歴史都市のダイナミズム理解：ローマ視察を通して、歴史的価値を保持しつつ現代的な生活と調和させる都市の取り組みを学び、自国の地域振興との比較を行う視点を得ました。
9. 備考	

以上

1. 研修中に学習した講義内容と大学での学びとの関連性

今回の研修で学んだ内容の中で、特にステークホルダー分析や、人口・地域データを用いた分析方法は、これまで所属ゼミで取り組んできた「観光まちづくり」のテーマと多くの共通点がありました。大学では主に、地域課題の抽出や観光振興の視点から解決策を考えることが中心でしたが、研修では災害リスクや環境要因も含めた多角的な視点が求められ、まちづくりの複雑さと重要性を実感しました。

特に、サントゥ・ルッスルジュ地域でのフィールドワークでは、観光資源の活用に加えて、安全性や持続可能性を意識した都市設計が求められることを現地の実例から学びました。

また、最終プレゼンテーションに向けて、イタリアのサッサリ大学で都市計画を専攻する学生や、日本の高知大学で地理学を学ぶ学生とともにグループワークを行いました。自分とは異なる専門分野を持つ仲間との協働を通じて、これまで見落としていた課題や視点に気づくことができ、多様な立場からの解決策を検討する力が養われました。こうした経験を通して、課題解決における俯瞰的な思考と、他者との協働の重要性を再認識することができました。

今後も、今回の学びを生かし、地域課題解決型の実践的な取り組みに積極的に関わっていきたいと考えています。

2. 研修期間を通して努力したことと、その結果、何を得たか

研修期間中、私はステークホルダー分析や人口・地域データを用いた課題分析手法の理解に努め、講義内容の復習や、フィールドワーク中の観察・記録を丁寧に行いました。グループワークでは、自分の視点到固執せず、他者の意見を積極的に取り入れる姿勢を大切にしました。

また、自身の考えを伝える際には、言葉だけに頼らず、図や写真などの視覚的な表現を工夫し、英語での説明不足を補うよう心がけました。これにより、グループ内での意思疎通を円滑にし、最終プレゼンテーションの質にも貢献できたと感じています。

最大の学びは、多様な背景を持つ人々と協働しながら課題に取り組むことで得られる気づきの大きさです。特に、異なる専門分野を学ぶ学生や、さまざまな世代の地元住民と意見交換を重ねる中で、自分一人では見えていなかった地域課題や新たな解決策の可能性に出会うことができました。

英語での議論では、表現力の不足を痛感する場面もありましたが、その分、情報整理や資料作成といった形でチームに貢献する姿勢を養うことができました。この研修を通じて、多角的に物事を捉え、状況に応じて柔軟に行動する力が身についたと実感しています。

1. 研修中に学習した講義内容と大学での学びとの関連性

今回のサルデーニャ島・サントゥ・ルッスルジュでの研修では、都市計画や歴史、そして島が抱える環境危機をテーマに、多様なレクチャーを受けました。特に、人口減少、観光のあり方、地域固有の資源活用といった内容は、私が大学で学んでいる地域再生や観光学と深く関連しており、大きな学びとなりました。

大学では、日本の過疎地域を対象とした観光振興や地域資源活用について理論的に学んでいますが、Santu Lussurgiuの事例も同様に「地域を守りながら活かす」という視点が重視されており、現地での学びが大学での内容と強く結びつきました。特に印象的だったのは、観光を単なる経済的手段としてではなく、地域文化や環境を持続可能にする仕組みとして捉える重要性を再確認できたことです。

また、島という地理的制約の中で行われる都市計画の課題は、日本の離島や山間部にも通じるものであり、研修で得た知見を自国の課題にも応用できると実感しました。大学での学びを実際の現場で深めることができた今回の経験は、非常に貴重であり、今後も国内外の多様なフィールドに積極的に関わり続けたいという意欲につながりました。

2. 研修期間を通して努力したことと、その結果、何を得たか

研修期間中、最も努力したことは、イタリア人学生たちとの英語での積極的なコミュニケーションです。お互いに英語が母語ではない中で、意見を伝える際に言葉を選ぶ難しさや、相手のニュアンスを正確に理解する難しさに直面しました。授業の一環として行われたアクティビティのルールが分かりづらいときもあり、もどかしさを感じる場面もありました。

特に、最終日のグループプレゼンテーションでは、意見を出し合いながら一つの計画案をまとめる必要があり、語学力以上に、相互理解と協力の姿勢が問われました。時には議論が噛み合わず、調整に時間を要することもありましたが、粘り強く対話を続けたことで、最終的には全員が納得できる提案を形にすることができました。

この経験を通して、実践的な英語コミュニケーション力の向上はもちろん、「完璧な言語力」よりも「理解し合おうとする姿勢」のほうが国際協働には欠かせないということを、実感をもって学ぶことができました。また、自分の意見を遠慮せずに表現することの大切さも強く感じ、今後の学びや将来の国際的な活動に生かせる自信を得ることができました。

この経験は、どのような環境でも柔軟に適応し、積極的に行動できる力へとつながっていくと確信しています。